様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2015
課題番号：２６７７００９８

研究課題名（和文）ウィリアム・フォークナーの作品における系譜とアイデンティティに関する研究

研究課題名（英文）A Study on Genealogy and Identity in William Faulkner's Works

研究代表者
島貫　香代子（SHIMANUKI, Kayoko）

東京大学・総合文化研究科・助教

研究者番号：３０７２４８９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、系譜／系譜学がウィリアム・フォークナー作品の登場人物のアイデンティティ形成に与えた影響を考察することにある。研究計画に基づいて『アブサロム、アブサロム！』以降のクエンティンからアイクへの語り手の変更や『行け、モーセ』におけるサム・ファーザーズとアイクの存在意義を考察した。2年間の研究期間ではフォークナー作品の「系譜」について総括することはできなかったが、『行け、モーセ』が「コンプソン付録」に与えた影響を検討するなど、フォークナー作品の間テクスト性を再確認することができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research project is to examine the effect of genealogy on characters' identity development in William Faulkner's works. Based on the project's plan, I looked closely at Faulkner's shift in narration from Quentin to Ike after the publication of Absalom, Absalom! and reconsidered Sam Fathers's and Ike's raison d'etre in Go Down, Moses. It was difficult to summarize the discussion in this two-year project, but I was able to reaffirm the intertextuality of Faulkner's works, such as Go Down, Moses's influence on the Compson Appendix.

研究分野：米文学

キーワード：ウィリアム・フォークナー　William Faulkner

１．研究開始当初の背景

フォークナー研究においてはこれまで多くのコンパニオンや事典が編纂され、初期の手書き原稿やタイプ原稿にいたる様々な文献が精緻に分析されてきたが、フォークナー作品における「系譜」の研究には新たな解釈の可能性が潜んでいる。確かに、『フォークナー事典』をはじめとする参考文献には、フォークナー家、バトラー家、オールダム家の系譜だけでなく、フォークナー作品に度々登場するコンプソン家、マッキャスリン家、サートリス家、スノープス家、スティーブンズ家、サトペン家の系譜が記載されている。しかしこれらの系譜は、フォークナー作品の複雑な人間関係を理解するために、研究者によって便宜的に作成されたものである。研究者による系譜が一族の関係性を明確にしたのは確かだが、フォークナーが作品に付け加えた「系譜」とは異なるものである。

そこで本研究では、考察対象をフォークナーによる「系譜」とした。研究者による系譜が先祖から子孫に至る一族代々の血縁関係を客観的に順次記した「家系図」であるのに対し、フォークナーが創作した「系譜」は彼独自の視点に基づく個人的記録の集合体である。自身の故郷からヨクナパトーファという架空の世界を創造／想像し、そこで様々な人間ドラマを展開させたフォークナーは、登場人物の位置付けやふるまいを常に意識していた。「系譜」はそのようなフォークナーの創作上の意図を反映した物語形式なのである。ヨクナパトーファの世界において家族のルーツは重視されるべきものであるにもかかわらず、フォークナーによる「系譜」の意義についてはこれまであまり注目されてこなかった。

２．研究の目的

フォークナー作品で実際に「系譜」が登場する作品は『アブサロム、アブサロム！』と『行け、モーセ』、そしてマルカム・カウリー編纂の『ポータブル・フォークナー』に収録された「付録―コンプソン一族―1699-1945」（「コンプソン付録」）である。これらの「系譜」の特徴としては、登場人物の一部に一族以外の人物が含まれていることが挙げられる。さらにフォークナーがこれらの作品で系譜の形式を用いた理由は不明であるため、議論の余地が多く残されている。

そこで本研究では、作品理解の手段や自明な事項―あるいは作品の単なる「付録」―として見なされがちなフォークナーによる「系譜」が、登場人物のアイデンティティの源として機能していることを考察する。「系譜」の実証的な研究は始まったばかりであるため、本研究もその発展に寄与するところが大きく、一定の研究成果が見込まれる。取り上げる作品が少ないうえにテーマが絞り込まれたことで、視野が狭く学術的意義の乏しい研究のように見える恐れもあるが、実際は他のフォークナー作品研究の試金石ともなりうる発展的なテーマである。本研究期間においては、上記作品以外のアイデンティティの問題に敷衍できるような研究成果を得ることを目指す。

３．研究の方法

フォークナー独自の「系譜」の創作技法は、『アブサロム』と「コンプソン付録」のあいだに執筆された『行け、モーセ』で一定の完成を見たと考えられる。『行け、モーセ』には「系譜」と明示されたところはないが、作品全体がマッキャスリン一族の系譜になっている。2 年間という短い期間内に一定の学術的成果をあげることを念頭に置いているため、本研究では、研究代表者の博士学位論文で取り上げた『アブサロム』と「コンプソン付録」のコンプソン家ではなく、『行け、モーセ』のマッキャスリン家の系譜に注目し、一筋縄ではいかないこの一族の系譜と登場人物のアイデンティティ形成の関係性を考察する。

研究期間中に具体的・建設的な研究成果を得るため、所属学会の学会誌に投稿し、口頭発表に応募して考察を深める。資料収集活動としては、年１回、ミシシッピ州を中心に現地調査と文献調査を行う。さらに継続的な先行研究の調査・分析を通して、本研究の有効性や問題点ひいては関連分野における立ち位置を定期的に再確認し、本研究の意義を高める。本研究の性質上、どうしても単独で行う作業が多くなるので、学会活動などを通じて他のフォークナー研究者やアメリカ文学者との交流を深めて人脈を広げ、本研究に関する情報交換や意見交換を積極的に行うことで、なるべく広い視野で研究を遂行する。

４．研究成果

１年目（平成 26 年度）は本研究課題に関する一定の成果を挙げることができた。主な成果は、平成 25 年 12 月に行った研究発表の内容を加筆修正した論文が、平成 27 年 1 月発行の『英文学研究　支部統合号』（日本英文学会）に掲載されたことである。本論文では、フォークナーの「ライオン」が『行け、モーセ』の「熊」に組み込まれた際の変更点の一つである混血のサム・ファーザーズの登場に注目し、「熊」でサムが登場したことによって、猟犬のライオンの位置づけに変化が生じたことを考察した。具体的には、ライオンが白人性、黒人性、そしてインディアン性のすべてを包含する存在であることに注目し、これらの人種的特徴が、森に住む伝説的な熊であるオールド・ベンを死に追いやるためにサムがライオンを森の中で見出して育てた理由であることを論じた。黒人の血が一滴でも混じっていたら黒人と見なされる「ワン・ドロップ・ルール」によって、チカソー族の酋長の息子でありながらも社会的には黒人の立場にあったサムが、ライオンとの出会いを

通して自らのインディアン性を強調し、最終的にインディアン的な死を遂げることについて考察した。さらに、この論考をふまえた内容の研究発表を、平成 26 年 10 月に日本ウィリアム・フォークナー協会全国大会において行った。この内容については、その後、論文のかたちにまとめる作業を行った。

申請当初計画していた 1 年目の現地での資料調査（米国ノースカロライナ大学チャペルヒル校のウィルソン図書館に所蔵されている「フランシス・テリー・リークの日誌」の資料調査。『行け、モーセ』の「熊」の第 4 セクションにおける系譜的な描写にインスピレーションを与えたと言われる。）は該当資料のデジタル化で不要となったため、予定を急遽変更し、平成 26 年 11 月にミシシッピ州およびテネシー州において 10 日間の現地調査を行った。この調査では、フォークナーの故郷であるオクスフォードをはじめとしてトゥペロ、ジャクソン、ナチェス、ミシシッピ川沿いの町、そしてメンフィスを訪れて、各地で有意義な資料収集を行うことができた。特に、ナチェスでは様々な農園を訪問し、『行け、モーセ』で大きなテーマとなる農園の放棄／維持についてより身近に考えることができた。

初年度は、前述の現地調査以外にも、所属学会の例会や年次大会にも出席することで、本研究課題に関する情報収集や意見交換だけでなく、必ずしも本研究課題に直結しない異分野や場所からも多くの示唆を得た。特に平成 26 年 6 月にアメリカ学会年次大会のために訪れた沖縄では、期せずして沖縄県立博物館・美術館と那覇市歴史博物館などで沖縄社会における家系図（家譜）の継承の重要性および記憶を記録することの意義を学ぶことができ、本研究の系譜に関する考察の視野を広げることができた。これらの現地調査や学会出張を通して、場所の縁や色々な場所を実際に訪れてみることの大切さを改めて感じた。

その他、年間を通じては、研究環境を整えたり、国内外の文献を定期的に探索・入手・分析したりすることで、本研究課題に関する考察をさら深められるよう努め、次年度につながる示唆を得た。

1 年目の成果をふまえ、最終年度にあたる 2 年目（平成 27 年度）では、フォークナーの「系譜」をより広い視野でとらえることを心掛けた。具体的には、フォークナーとアメリカ南部の農園の関係性に焦点を当てることで、作家が急速に失われつつあった南北戦争以前の南部文化の保存・継承を重視していたことについて考察した。その際に注目したのは『行け、モーセ』に登場する様々な住居形態である。マッキャスリン農園の存在意義が強調される一方、アイクが農園の相続を放棄した後に結婚して移り住んだバンガローについては、わずか数頁のなかで簡単に触れられるだけにとどまっており、一考の余地があるからだ。『行け、モーセ』には『アブサロム』や「コンプソン付録」のように明記された「系譜」はないが、「昔あった話」や「熊」で系譜のようなかたちで記述された部分にアイクのバンガローに関する言及があり、アイクの住居形態の変化は彼の人生の変遷をたどるうえで無視できない要素である。考察を進めるにあたり、平成 27 年 11 月に後述の現地調査を実施した。

本研究テーマを深く掘り下げるため、2 年目は 1 年目に訪れることのできなかったミシシッピ州南部とルイジアナ州の農園やルイジアナ州ニューオーリンズ近辺を中心に現地調査と資料収集を行った。特にミシシッピ州にあるロスウッド農園では『行け、モーセ』の「熊」に登場するマッキャスリン一族の台帳を思わせるような一族の台帳が公開されており、なかなか見ることのできない貴重な資料を閲覧することができた。農園で得た示唆や資料は、下記の論文を執筆する際に大いに役立った。

2 年目の研究成果については所属大学の紀要論文のかたちにまとめることができた。フォークナーが『行け、モーセ』を執筆していた 1930 年代後半から 1940 年代初頭までのアメリカの住居形態や彼自身の住宅事情に鑑みると、バンガローがアイクの終の棲家として描かれていることについては一考の余地がある。アイクのバンガロー建設には、通信販売のキット住宅（組立式住宅）の普及にともなうバンガローの流行といった 20 世紀前半の住宅建設状況に対するフォークナーの批判的心情が反映されていると思われるからだ。本論文では、『行け、モーセ』に登場する様々な住居に言及したうえで、アイクのバンガロー建設を通して描かれる新しい住宅様式の登場とそれに対するフォークナーの幻滅について考察した。アイデンティティの拠り所（該当年度の文脈で言えば住居形態）の変化に対するフォークナーの思いを、彼自身の執筆当時の住宅事情から明らかにした本論文は、研究代表者のアイデンティティに関する今後の研究計画を検討するうえで重要な視点を提供してくれた。

1 年目と同様、2 年目も、年間を通じて研究環境を整えたり、国内外の文献を定期的に探索・入手・分析したりすることで、本研究課題に関する考察をさら深められるよう努めた。最終年度は特に充実した資料収集を行うことができ、今後フォークナー研究を続けていくうえでの大きな足掛かりを得た。

2 年間の研究期間を通して主に『行け、モーセ』に注目してきたが、研究計画に基づいて『アブサロム』以降のクエンティンからアイクへの語り手の変更や『行け、モーセ』におけるアイクの役割などを系譜とアイデンティティの観点から考察することができた。本研究期間中にフォークナー作品における「系譜」の意義について総括することはできなかったが、最終年度の紀要論文で『行け、

モーセ』が「コンプソン付録」に与えた影響に言及するなど、フォークナー作品の間テクスト性を再確認することができたのは収穫であった。また、本研究期間中は農園に関する現地調査を中心に行ったため、今後機会があればバンガローに関する現地調査を実施したい。本研究によって家系図にとどまらない広い視野でフォークナーが創造／想像した「系譜」の意義を検討できることが明確になったため、今後も本研究課題について継続的に考察を重ねていく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 島貫香代子、新しい時代の到来と幻滅―*Go Down, Moses* におけるバンガロー表象、アメリカ太平洋研究、査読無、第 16 号、2016 年、pp. 42-57

② 島貫香代子、“Lion”から“The Bear”へ―Lion と Sam Fathers の関係性、英文学研究　支部統合号、査読有、第 7 号、2015 年、pp. 73-79

〔学会発表〕（計１件）

① 島貫香代子、アイクとサムの系譜の連動性―「熊」における物語の再構築、日本ウィリアム・フォークナー協会第 17 回全国大会、2014 年 10 月 3 日、藤女子大学（北海道札幌市）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
島貫　香代子　（SHIMANUKI, Kayoko）
東京大学・大学院総合文化研究科・助教
研究者番号：３０７２４８９３

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし